

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

**〔最優秀賞受賞研究／ポスター部門〕 生活圏は国境を越えて：国際学生寮の空間デザイン**

著者	新井 康平
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	16
ページ	134-140
発行年	2015-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10041">http://hdl.handle.net/10114/10041</a>

## 生活圏は国境を越えて —国際学生寮の空間デザイン—

国際文化学部 甲ゼミ

新井康平・古賀健四朗・横畑元希・芳賀樹生・田村琢・杉山美波

### 1. はじめに

法政大学は現在、持続可能で平和な地球社会の構築に貢献する大学を目指すべく「法政大学グローバルポリシー」[1]を掲げており、今後推進するプロジェクトの一つに「国際学生寮等の整備」がある。その一方で、国際文化学部には全員参加の必修留学プログラム「Study Abroad プログラム（以下 SA）」があり、毎年 200 名を超える学生が 10 カ国 16 大学に留学している。彼らは寮生活やホームステイ生活を送った実体験を持ち、充実した留学体験も不満の声もある。留学での重要な位置を占めるはずである寮やホームステイといった生活圏は、海外からの留学生を迎える学生寮を構想する際にも参考になる点も多いと思われるが、その実態は十分に明らかであるとは言えない。

本研究は第一歩として、国際文化学部生に対して、留学先の寮生活やホームステイに焦点を置いた SA 体験の調査を行い、その分析結果を基に人と人との交流の場に重点をおいた国際学生寮を検討し、その一部を建築模型として具体的に提案する。

### 2. 従来の研究

国際学生寮は近年、多くの大学で整備・拡張が進められているが、明確なコンセプトをもつ国際学生寮の先行例として早稲田大学の「国際学生寮 WISH」、国際教養大学「こまち寮」、上智大学の「国際交流

会館」が挙げられる。また、小規模なコミュニティを基盤とする建築空間の先行研究として、例えば山本理顕らによる「地域社会圏主義」[2]がある。

### 3. 留学生生活インタビュー調査

本研究を始めるにあたり、SA 経験後の国際文化学部生と法政大学以外の留学経験者を対象とした調査を行った。事前に大まかな質問事項を設定しておき、参加者の回答によってさらに詳細に質問していく半構造化インタビュー法を用いた質的インタビューを個別に行った。調査参加者は計 25 名で、留学先はイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、スイス、フランス、ロシア、スペイン、中国、韓国の計 10 ヶ国である。参加者の年齢は 20 歳～23 歳男性 9 名・女性 16 名で、宿泊形態は寮 18 名、ホームステイ 7 名であった。

インタビューは、(1)留学生生活を過ごした建物の間取りと形態、(2)生活で便利だったこと・不便だったこと・良かったこと・悪かったこと、またその体験の具体的内容、(3)生活ルール (4)日常生活におけるトラブル (5)同居人との関わり、の 5 つの項目について聞いた。従来の研究でも明かされていない留学中の実体験を深く詳しく抽出するために、一人あたり約 50 分間のインタビューを行い、計 15 時間分の調査データを得た。

### 4. 寮生活体験グローバルマップ

インタビューデータをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、カテゴリー化していく KJ 法 [4] に基づいて留学生生活における問題事象や魅力的事象を組織化し、整理・分析した。その結果として、「プライベートな空間は必要だが、他人とも交流したい」「異なる文化圏の人との交流で受ける充実感・摩擦と、同郷人どうしの交流

の安心感への欲求」「生活規則を緩和する要望、厳格化する要望」などの多様なユーザ要求があり、それらは相矛盾する要素を含むことが分かってきた。そしてこのような各国、各大学にまたがる留學生活の問題事象や魅力的な事象をキッチン、ランドリー、ラウンジ、一人部屋などといった空間別と、話す、食べる、料理するなどといったアクティビティ別にまとめた「寮生活体験グローバルマップ」を作成した。

## 5. 空間デザインへのユーザ要求

「寮生活体験グローバルマップ」から、居住区、食堂、シャワー・風呂、ラウンジ、キッチンなどといった場所ごとのカテゴリーにおけるユーザの要求を分析した。例えば、居住区では寮内の日本人の割合が高いと、日本人同士の内輪な関わりばかりの人間関係になるという意見から日本人学生と留學生の共生する混在型学生寮、食堂では外国人と一緒に食事をするとコミュニケーションの上達に繋がったという意見から食事を通じた交流、ラウンジでは一人部屋で寂しくなっても各階のラウンジで話せたという意見からみんなで集まれる安らぎの空間、キッチンでは外国人と一緒に料理ができて楽しかったという意見から会話や交流のきっかけを生む共同調理場などがユーザ要求としてあがった。また、場所とは別にルールというカテゴリーも設け、ロビーに24時間管理人がいたため安心安全だったという意見から、寮生活をサポートする住み込みの管理人夫妻や万全なセキュリティ管理がユーザ要求としてあがった。また、その他にもシャワー・風呂などの水周りを清潔に保つことや寮生以外の人の立ち入りの制限など様々なユーザ要求が存在した。

## 6. 国際学生寮の空間デザイン案

### ①暮らしから家族のように繋がっていく学生寮

既存の学生寮には部屋を四角いフロアに等間隔に配置するだけのものが多く、それでは寮生同士の交流が限定される。その問題を解決し寮生同士の交流を作り出すために、フラットを配置し、その中に4人程度の寮生を住まわせ共同生活をさせる空間デザインを採用している学生寮も多く存在する。しかし、それらの学生寮の問題点として、寮生の交流がフラット内だけの限定的なものになりフラット外との繋がりは希薄になってしまうという意見がインタビュー調査で得られた。そこで本研究ではただ個室が並べられただけの既存の学生寮とは異なる、寮全体の居住者が互いに心を通じ合え、家族のように繋がっていくことを目標とした学生寮の設計案を検討した。以下にこれを実現するための空間設計のプロセスについて述べる。

### ②階層的なグループの設定

暮らしが小さな単位から大きな単位へと繋がっていく学生寮を実現するために、この学生寮内にはフラット（個人部屋4つを一つの部屋に配置した4人のグループ）、フロア（フラット4つを一つの階に配置した計16人のグループ）、イエ（フロア2つを合わせたひとつの棟を共有する計32人のグループ）、寮全体（イエ4つを合わせた寮生全員、計128人のグループ）という4層のグループを設定し、それに即した空間をデザインする。そうすることで、寮生が小さな集団から大きな集団に段階的に人間関係を大きくしていく流れを作る。

### ③フラットの空間デザイン（図1）

フラットを設計する際の工夫として、まず寮生一人ひとりが生活する個室の設備を最小限にし、寮生の個室外での活動を促す。フラット内には机、椅子、テレビ、ソファを設置するリビングを作りフラットメンバー同士の会話の場として活用する。通路のすぐそばにリビン

グを置くことでそこに人が自然と集まるようにし、フラット内のメンバーの交流を深める。さらにフラットの外壁にすりガラスを用いて、フラットの外側からリビングを見えるようにし、フラットの中に人間関係が閉じこもらないように考慮した。

#### ④ イエの空間デザイン（図2）

イエを設計する際、立体構造

のデザインにすることにより1階と2階の空間を繋げると同時に全体を開放的にし、イエにいる全員が互いの存在を感じ合うことで少しずつ繋がり合える空間を作った。そしてフロアごとにラウンジを設置しそのフロアの寮生同士の交流のスペースとした。また、キッチン راラウンジの近くに設置し、キッチンで料理を作ってラウンジで食べるという流れを作り、料理を通じた交流を促す。

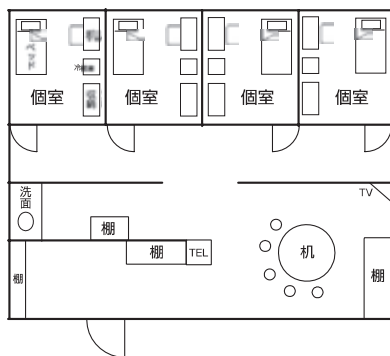


図1 フラットの設計図案

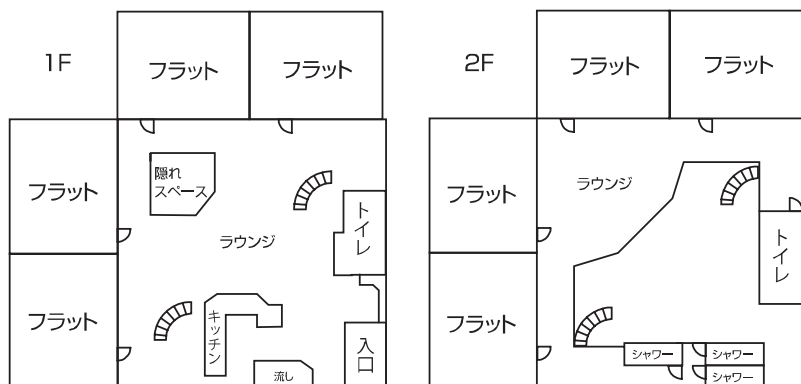


図2 イエの設計図案

### ⑤寮全体の空間デザイン（図3）

従来多く見られるビル型ではなく低層の平屋型の学生寮を設計した。ビル型の学生寮のように階が異なると住人同士の交流が希薄になりがちであるが、4つのイエから成る平屋型の学生寮にすることで「暮らしから家族のように繋がっていく学生寮」を狙うことができる。また、4つのイエを繋ぐ橋に生活に必要なファシリティの機能を持たせることで、イエを越えた寮全体の交流の機会をもたらすことができると考える。そして寮の敷地中央に中庭を設置することで、スポーツなどの屋外での交流が見込める。

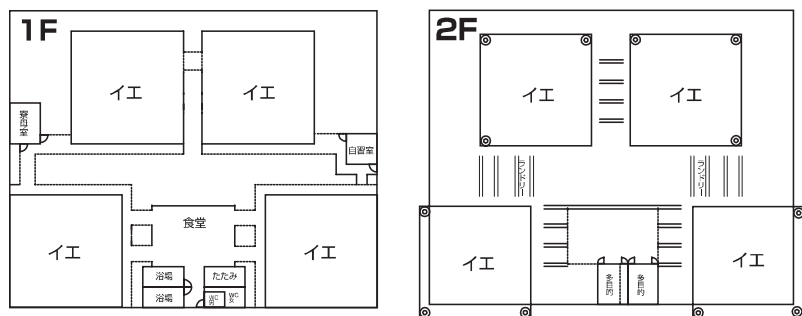


図3 寮全体の設計図案

## 7. 結び

本研究では、「住人一人の生活圏を建物全体に広げる」というコンセプトの元で、留学経験者への質的インタビュー調査により留学中の寮やホームステイでの生活の実体験、困った事象、充実した体験などをリアルに反映し、人と人との交流の場に重点を置いた国際学生寮の空間デザインを提案した。

一方で今後の課題もある。まず、経済的な問題である。今回のデザイン案は約7200㎡もの平地を前提としている。仮にそれを都内に用

意し、居住する寮生の数が約 120 人となると一人当たりの家賃は現実離れしたものになる。また、今回の調査参加者は日本人のみであったが、外国人留学生から見た国際学生寮のユーザ要求の調査が必要であることは明かである。そして異文化の交流として備えなければならない、宗教などの文化的背景をはじめとする様々な要素に対し配慮が不十分であった。今回の国際学生寮の設計の妥当性を寮生の視点、実現可能性の観点から評価を行うことが今後の課題として重要である。



(a) イエ



(b) フラット

図 4 制作した模型

## ■参考文献

- [1] 法政大学グローバルポリシー [http://www.hosei.ac.jp/documents/NEWS/gaiyo/2014/hosei\\_global\\_policy.pdf](http://www.hosei.ac.jp/documents/NEWS/gaiyo/2014/hosei_global_policy.pdf)
- [2] 山本理顕『地域社会権主義』LIXIL 出版、2013 年
- [3] ウヴェ フリック『質的研究入門』春秋社、2002 年
- [4] 川喜田二郎『続・発想法』中央公論社、1970 年